

最近の医学部入試の現状と問題点について —近年の医学部受験を経験した保護者の立場から—

順天堂大学医学部（昭61年）村上 茂樹

近年、医学教育の素晴らしい進歩と充実ぶりは周知の通りであるが、保護者として、長女と次女の二人の医学部入試を実体験した保護者の立場から、近年の医学部入試の極めて厳しい現状と問題点について述べてさせて頂きたいと思う。

近年、医学部入試は、周知の通り従来にも増して難化の一途をたどり、異常な高競争率が加速化している。事実、2000年度の私立医学部一般入試の志願者は4万5500名であったが、2014年度には10万人の大台を超えて、2000年度に比べ倍以上、即ち230%もの志願者を集めるまでになった。特に最近2年間の志願者数の伸びは著しく、2年連続で毎年何と1万人以上ずつも増加して、最近の2年間だけで志願者が2万4千人も著増し、私立医学部の一般入試の募集定員が僅か2、700名余に対して、志願者は37.6倍にも上ったのである。このような志願者数の著増化は、大企業の業績悪化に伴う新卒採用枠の減少や歯学部及び薬学部からの医学部への再受験などと共に、司法制度改革により、従来の弁護士志望層など医家系以外の志願者も著増し、さらに、毎年1万人以上もの志願者数増に伴う不合格者の「積み残し現象」が今後も年々累積してゆくものと推測される。

事実、首都圏での顕著な例として、3日間の受験が可能な帝京大学では、定員110名に対し、志願者数がほぼ8000名にものぼり、また、地方の大学でも、九州地区の福岡大学医学部の例では、長女が現役合格した6年前の時代の一般入試志願者数1600人と比し、僅かこの数年間で志願者数が激増し、昨年度は2900名を超え、1300名以上もの志願者数が急増して、競争率が約44.6倍にもなり、僅か50名程度の繰り上げ合格を含めても3000名近い志願者の内、僅かその上位4%のみが合格出来る極めて厳しく狭き門となってきた。

また、久留米大学医学部においても同様に、6年前の志願者数1300名から昨年度も2200名以上へと1000名近く志願者数が増加し、併せて入学者の多浪化の傾向も平均4.8浪と如実に表れている。

そして、本年も東北医科薬科大学が新設された影響にも関わらず、例年同様の信じがたい受験者数と驚異的な競争倍率が続いている現状である。

抜群の集中力と調整力により幸いにも一般入試で現役合格出来た6年前の長女の時代とは僅か数年間の違いではあるが、医学部入試の難度が大きく変化し、極めて厳しい情勢の中で、次女の場合には医学部予備校での浪人生活を余儀なくされた為、父親として医学部受験の重圧の渦中にある娘をいつも笑顔で真綿で受け止める様に努めた。また、自分自身もプロ野球選手も修行する鹿児島にある高野山真言宗の寺で、毎月欠かさず護摩修行を続け、岡山大学医学部客員教授などでもある大僧正大阿闍梨の下で炎の高さ3メートルにも及ぶ大きな護摩の火のすぐ目の前で般若心経や理趣経などの真言を大声で約2時間唱え続けた。護摩の火の熱さと酸欠状態に加え、特に暑日には脱水も重なって意識も遠ざかり、倒れそうになる護摩修行の苦しい時にも、「次女はもったときつく辛い思いをしているのだ。」と次女の医学部受験の苦しさを想い、必死に大声で真言を唱えて限界ぎりぎりのところで耐えて乗り越えることが出来た。

また、心願成就の為に洒落なども辛抱する年頃の次女を思い、自分自身もテレビも歌舞音曲も断ち、朝夜に般若心経や理趣経を毎日繰り返し聴き、読呪を続けてきた。さらに学会出張のない休日には、県立図書館や自習室で自身も勉強を続けた。

次女も前回は2校の繰り上げ合格を待ち続けた悔しさもあり、身上である粘りと辛抱強さを発揮して、「何としても医学部に合格する！」という強い気持ちを持ち続けて精進を重ね、高校時代の長期の不登校や進路の悩みなどの原因で低迷していた学力を飛躍的に向上させ、最後まで落ち着いて安定した冷静さを保ちながら医学部受験を続けることが出来た。こうして、本戦である前期の医学部受験シリ

ーズをどうにか無事に終え、その結果を待つ時の心境は正直たまらない気持ちだった。次女なりにこれまで精一杯医学部受験に精進を重ね、模擬試験などでも学力偏差値も飛躍的に向上させることが出来たが、あくまでそれは模擬試験での話である。本番の医学部入試では30～40名に僅か1名合格の厳しさであり、受験会場の各教室の受験生の中からほぼ1名に過ぎず、特に、合否を分けるボーダーラインでは、僅か1点で数十名が並ぶ厳しい現実があるからである。

実際には絶対にあり得ない事ではあるが、例えばプロ野球のCSシリーズの様に、次女の模擬試験の成績が本番の入試で少しでもアドバンテージになってくれればどんなに良いかと思うことも一再ならずあった。また、もしも前期受験での結果が出ない時は、さらに驚異的な100倍近い倍率の地獄の後期試験が待っているかと思うと親としてはたまらない思いであった。もしもそうなったとしても、次女は決して怯まず、その後期試験のシリーズにも勇んで受験してゆくであろう。そして、自分も父親としてその過酷な戦いに挑んでいく次女を精一杯の笑顔でどっしりと見守ってやらなければならないと心を決めた。

しかし、それでも尚、結果が出なかった場合には、これまで懸命に走り続け、本人なりに学力を飛躍的に向上させてきた次女に、「さらにもう一度同じ努力を1年間必死でやり直せ！」と言う事は、親の目から見ても余りにも酷であり、例えるならば、必死にマラソンを1年間走り続けてきて、ようやくゴールした直後に僅かな休息で「再度もう一度全力で走れ！」と命令する気にはとてもなれない心境だった。

そしてまた、親としても自分自身これ以上子供のために何をすれば良いのかも答えに窮し、頭が堂々巡りになりながらなかなか寝付けぬ夜が更けていった。

自分が最も恐れたのは、次女が多浪することではなく、むしろ「医学部に入学できる可能性のある学力を身に付けた。」という中途半端な根拠のないプライドのまま無為に若年の時代を漫然と過ごしてしまうことであった。

そして、この様な根拠のないプライドだけで次女が今後の人生を無為のまま生き

ていく事だけはして欲しくないと切に願った。しかし、現実には十数万人もの医学部受験生の中には30歳近くまで何年も多浪し、挙げ句の果てにいつまでも医学部に入学できない厳しい現状があることを再認識させられた。

そして、この様な様々な複雑な思いが交錯しながら、翌日の朝を迎え、午前の診療中に期せずして予備校から1校目の2次合格の朗報のFAXを頂き、「これで医学部受験浪人を続けなくても済むのだ。」と少しだけホッとした気分になれた。

1校目の2次合格後に次女と僅かな面談する時間があり、あと2校の2次試験を控えている状況の中で、これまでの笑顔と共に、自分自身も医学部受験で後悔の念を今も持ち続けていることを例に挙げ、絶対に気を抜いたり油断してはいけないことを父親として心を鬼にして厳しく諭し、叱咤激励した。

この様な様々なドラマはあったが、幸い、次女は九州の2大学の医学部と中国地区の医科大学の計3校から正規合格を頂くことが出来た。

ただ、今回のことで、自分が「医学部入試合格法」など語れる様な立場では到底なく、むしろ、颯田クラブの先生方の優秀なご子息・ご令嬢においては、医学部受験でもさほど苦労されずに合格された方も数多くいらっしゃると思うし、また、自分の様に火の粉と灰と汗にまみれながら泥臭く努力なくしても「俺はもっとスマートに巧く出来る。」とのご意見もあろうかとも思う。今回強いて言うならば、指導者の先生方と次女との緊密な信頼関係が構築された上で、先生方の熱心なご指導とご尽力の下で、本人が不断の努力と精進を続け、本当の必死さとがむしゃらさを親子共々実体験しながら神の領域に少しだけ近づくことで、世間一般の方々が仰るところの「奇跡」を生み、天の御加護を頂くことが出来たのではないかと愚考している。

また、医学部予備校の先生方から、私自身に対しても「お父様もかなりご忍耐強くなりましたね！」と有り難い言葉を頂いた。

次女も厳しい医学部入試を平常心で落ち着いて安定した冷静さを保ちながら受験を続けることができ、これまで本番では苦戦していた数学でも粘りの高得点を獲

得し、さらに、2大学の物理では授業でほぼ勉強し、かつ、実際に解いた経験のある問題が全て出題され、娘も「こんなことって本当にあるんだ。！」と入試時の筆も進み、ほぼ満点を獲得することが出来たとのことであった。

医学の領域を超えて、次女の心願成就のために必死で大声で唱え続けた護摩修行の真言により、本当の必死の祈りが時間や距離を超えて通じることもあるのではないかと感じ、父親としてとても嬉しく思っている。

そして、合格発表後の進学先の相談で幾度も長時間次女と話し合う中で、目標達成のための熱意と粘りや必死さの大切さを再認識し、さらに、目標達成と向上のための創意工夫と緻密さの必要性を痛感した次第である。

私は、中2の14歳の時に父親と、そして、大学1年の19歳の時に母親と死別し、成人する前から自分で考え、決断して行動し、自ら責任を取るという医師になるための修行を繰り返しながら、颯田奨学会でも故・大嶋理事長先生と故・上西事務長様をはじめ立派な役員の皆様の下で6年間手厚いご指導と奨学金を頂き、多くの優れた颯田クラブの先生方や医学生の皆様との交流もさせて頂き、自分の人生にとっても貴重なご教示と支援を頂き非常に感謝している。

今後は、学業成績優秀者として福岡大学医学部より表彰を頂き卒業し、医師国試に合格して研修医の道を歩み始める長女と、厳しい医学部受験を乗り越えて同大学に学び、一人前の女性研究医を志す次女を心の支えとし、感謝と恩返しの気持ちを忘れず、日々の診療や手術と医院運営、そして、母校での客員教授としての研究と教育にも微力ながら努力を続けて行く所存である。

宇土市南段原町11-6
医療法人 湘悠会 むらかみ眼科クリニック
TEL. 0964-22-6600
<http://www.murakami-ganka.com>
E-mail. drsigeki@bronze.ocn.ne.jp